



株式会社アーベルソフト

現代社会はデジタル社会であり、デジタルがない社会生活はありえない。この時代の流れに乗って成長を続けているのがアーベルソフトだ。同社は、各種アプリケーションの開発や、データベース系システムの開発を得意とするソフトウェア開発企業で、2024年8月、創業40周年を迎えた。近年、普及が目覚ましいDXや生成AIなど、コンピュータの新技術に果敢に挑戦し、独自の新商品を開発、次なる創業50年に向けて快進撃を続けている。

会社を企業した義兄に誘われ一念発起

アーベルソフトは1984年8月、富士通のエンジニアであった佐藤達雄氏が資本300万円で坂戸市内に設立した独立系のソフトウェア企業で、2024年に創業40周年を迎えた。

現社長の西岡和也氏は佐藤前社長の義理の弟で、創業後まもなく、佐藤氏から“仕事を手伝ってくれないか”と打診され、勤めていたプラント・エンジニアリング会社を退職してアーベルソフトに就職した。義兄が始めた事業について“何か面白いことをやっているな”と感じていたが、実際に会社を辞め、初めて会社を訪問した時の様子を「まだまだ未成熟な感覚だった。とにかく食べていくために地道な活動を始めた。」と回顧する。社名のアーベルソフトとは、ノルウェーの数学者、ニールス・ヘンリック・アーベルに由来する。創業者の佐藤氏は名古屋大学数学科の出身で、尊敬する数学者アーベルの名を社名にした。

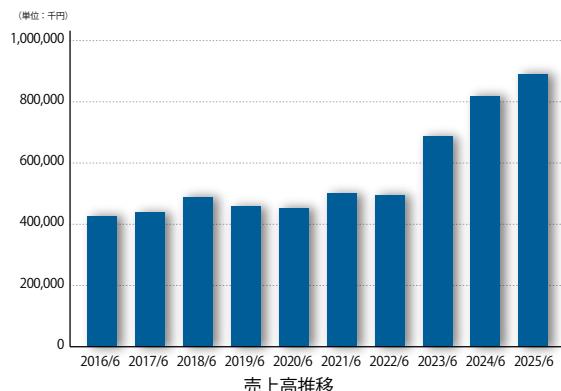
佐藤氏はプログラム開発が得意でエンジニアとして活躍していたため、西岡社長は入社後、財務や総務など管理部門を統括し、経営側の中枢を担うようになった。その後、二人三脚で会社を運営し、成長させ、2010年9月、西岡氏が社長に就任し、創業者の佐藤氏は会長職に就いた。

時代の最先端を追い続ける

設立当時のアーベルソフトは、都内企業からシステムの受託開発を請け負っていた。なぜなら、地元ではシステム開発を発注する企業はほとんどなく、営業拠点を都内に求めるしかなかったからだ。同社は長年、各種データベース系システムの開発やサーバー等のインフラ構築を得意として取組んできた。

2021年9月デジタル庁が発足して以降、IoT、AI、ビッグデータなどの発注が増えるようになってきた。DX(デジタル・トランスフォーメーション)という言葉が生まれて、いち早く動向を見極めて対応してきたことが結果につながっている。例えば、同社は大手企業向けに生産管理や販売管理などのシステム開発・保守を手がけてきた。その後、ブロックチェーン技術を活用し、マイナンバーカード関連システムの開発にも着手。近年では、大手企業のDX推進を背景に開発依頼が増加し、事業領域が広がるとともに、売上も順調に伸びている。

現在、会社全体の売上を100%とした時、データベース系のシステム開発が約40%、DX関係が40%、残り20%が開発したシステムの保守・運用となっている。前任の佐藤氏が“新しいモノ好き”で、常に業界の先端的技術、最新技術に取組む社内風土が醸成されており、それがビジネスとして



奏効している。

AWS から高い評価を受ける

1984 年の創業から 40 年、技術革新の流れの中で常に自社の技術を磨き続けてきた。社員も新しい分野に積極的に目を向け、社内では技術的に尖った人財も育っている。AI については、まだ事業化の途上にあるものの、将来のビジネスの柱に育てるべくエンジニアたちが自主的に社内勉強会を定期開催している。勉強会では自由な発想からさまざまな商品やサービスのアイデアが生まれている。特に近年は、生成 AI や AI 技術について『面白い』で終わらせらず、具体的に商品化を目指す意気込みが高まり成果につながっている。

2024 年 10 月、Amazon のクラウドサービス関連企業 AWS 主催の「AWS Japan 生成 AI ハッカソン」決勝戦では、同社の“楽しく学べる生成 AI システム「AI Teck Talkers」が準優勝を獲得した。「AI Teck Talkers」は、バーチャル会議向けシステムで、会議がなかなか活性化しない時、打開する目的で AI エンジンが作成した「ダミーの人物」を忍ばせて参加させる。状況に応じて鋭い指摘の内容も話させる仕組みとなっており、周りの会議出席者も「ダミーの人物」につられて会話が活発化するという特徴を持つ。また、「AI Teck Talkers」が準優勝した 1 カ月前の 2024 年 9 月、同じ AWS 主催の「生成 AI コンテスト 開発実績部門」で、同社の地域情報写真配信サービス『ビューちゃんねる』が見事優勝した。

『ビューちゃんねる』は、ほぼリアルタイムに地域の道路や河川状況を把握するソリューションだ。

例えば、ゲリラ豪雨や台風などで冠水の危険が迫る場合、遠隔で状況を確認することでいち早く災害対策を行うことができる。

サービスで提供される画像は、電柱に取り付けられた IP カメラで取得され、数分おきに LTE 回線経由でサーバーに送られる。自社開発の画像認識モデルは危険度を AI により判定する仕組みとなっており、冠水や増水により危険と判断すると自動で関係者へアラート通知を発信する。増水などの危険は、人間なら映像を見ればすぐに判断できるが、コンピュータに学習させるのは容易ではなかった。従来は過去の氾濫データを AI に学習させていたが、生成 AI エンジンの導入によりコンピュータが自律的に学習し、危険度判定のスピードと精度が飛躍的に向上した。コンテスト主催者の AWS からは「埼玉県の坂戸市にこれほど技術のある会社があると思ってなかった」と驚かれたという。

地域情報写真配信サービス 『ビューちゃんねる』の誕生と展開

『ビューちゃんねる』の誕生の経緯は、2019 年 10 月の台風 19 号による近隣の大きな被害だった。台風が過ぎた翌朝、地域全体がひどい冠水被害となっていた。2020 年 6 月西岡社長が副会長を務める公益社団法人 埼玉県情報サービス産業協会の会議の場で、議論を展開していた毛呂山町の職員に声をかけられ、国土交通省のスマートシティ自治体に採択された具体的な事業について相談を受けた。その毛呂山町が東京電力と電柱を利用できる事業を提携しているのを知った西岡社長は、「電柱にカメラを設置し地域の災害を見守るのはどう



社内での技術者による勉強会風景



AWS 生成 AI コンテスト 1 位：プレゼン開始前の風景

か？」と発案した。毛呂山町の地元ケーブルテレビ会社も協力し、ケーブルテレビ経由で配信する地域情報写真配信サービス『ビューちゃんねる』が誕生した。毛呂山町のサービス開発にあたっては、地元議員の推薦もあり埼玉県地域経済牽引事業創出補助金を活用して実施したが、『ビューちゃんねる』が各種メディアで取り上げられると、翌年には、朝霞市、志木市、2024 年には越生町、2025 年には鳩山町がシステムを導入した。

システムはサブスク型（サブスクリプション／定期的に料金を支払い利用するサービスやコンテンツ）で、自治体は設置場所を決めるのみ。カメラ設備や工事費はアーベルソフトが持つ情報提供サービスとした。『ビューちゃんねる』は、カメラ 1 台あたり月額 3 万円で提供するビジネスモデルを展開している。

サービス費用には保守費用も含まれており、ユーザーである自治体はメンテナンスフリー。契約期間中にカメラ設備が壊れた場合は、サービス料金の中で交換する仕組みだ。自治体からすると導入しやすいシステムになっている。

カメラの画像の著作権は自治体と同社の共同版権としている。「画像情報はビッグデータとなる。幹線道路や河川を面的にとらえ気象情報などと組み合わせ、さらに AI を掛け合わせることで将来は冠水予測をすることが可能となるだろう」と西岡社長は未来を見据えている。

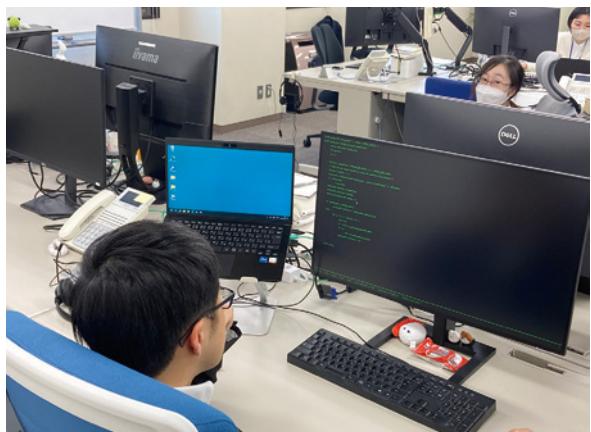
『ビューちゃんねる』の利点は、災害発生時に送られてくる画像を見ながら、会議室や事務所などをコントロールセンターとして指示を出せること

だ。災害発生時、防災担当者は集合して、重点地域を決めてパトロールカーを出すが台数には限りがある。多くの場合、経験則で道路封鎖するなど対策を取る。現場を行ったり来たりするケースが見られるところ、『ビューちゃんねる』を使えば、初動対応から効果を発揮することができる。県内で採用する自治体が増えていけば、次に県外の自治体にも提案していく。そのためには、「PRなどを積極的に行い、自治体の目に留まるようにしたい。いつかは日本全国に広がって、日本版 災害 Map の様な形になれば、国土強靭化計画にも資するのではないか」と西岡社長は目を輝かす。

お客様からの信頼を大切に経営に従事

西岡社長が経営者として長年心掛けてきたのは、お客様からの信頼だ。「坂戸市の小さな会社でブランドがある訳ではない。大手企業の取引先に信用してもらうためには、自分を信用してもらうしかなかった」と回顧する。お客様との約束は有言実行してきた。基本方針は、責任感を持って誠実に業務を遂行することだ。

ソフトウェア業界にはさまざまなタイプの企業があり、成長して利益を得ると会社を売却するケースも少なくない。そんな中、西岡社長は事業を生業として続けるうえで、最も重要なのはお客様からの信頼だと考え、『言ったことや約束したことは必ず実現する』という姿勢で取り組んでおり、その姿勢は自然とお客様にも伝わっている。それまでお客様が扱っていた大手企業が導入したシステム



システムの開発風景

ムから導入企業が撤退すると、アーベルソフトに何とかして欲しいと相談が寄せられ、解析・改良してシステムを維持するサービスを手掛けている。大手企業が手を引いた既存市場の中に新しいビジネスチャンスがあり、同社は基本的に顧客ニーズに対応してきた。

着実な歩みによって、社員数 70 人まで成長したほか、ソフトウェアを開発するパートナーも 30 ~ 40 人となり 100 人強の体制でビジネスを開拓している。また、ユニークな点で同社には北海道出身の社員が多いことが挙げられる。1997 年に北海道拓殖銀行が経営破綻した時、地元が不況に陥り学生の就職先が先細った。この時から同社は地元の「吉田学園情報ビジネス専門学校」(現、北海道サイバークリエイターズ大学校)と提携して学生の採用を積極的に行ってきました。社員寮を用意して若き技術者を招き入れ、現在までその流れが続いている。2022 年からは同学校からの依頼で、AI の得意な社員が臨時講師として出かけ、特別授業を行うなど産学連携を行っている。

創立 50 年に向けての体制強化

昨年創立 40 年を迎えたアーベルソフトの次の目標は創立 50 年だ。西岡社長は現在、次期後継者としてご子息の西岡和紀取締役に経営のバトンを引き継ぐ準備を進めている。その一環として、組織

『ビューチャンねる』のシステム概要



や就業規則、評価基準などの見直しを進めている。「社員数が 200-300 人位の会社になっても対応できる組織体に改革する」と西岡社長は言う。また、昨年からは海外展開も始めた。ベトナム ハノイにあるソフトウェア企業と提携し、開発の委託を行っている。「このビジネスモデルがうまくいけば、さらに海外企業との連携を強化していきたい」と話す。創立 50 年時には現在の売上高 8 億 9,000 万円の 2 倍以上の売上高 20 億円程度を視野に入れており、さらなる成長が期待される。

企業概要

株式会社アーベルソフト

代表取締役：西岡 和也

■創業：1984 年 8 月

■事業内容：各種システム開発、インフラ構築、保守、メンテナンス

■本社：埼玉県坂戸市薬師町 10-2

■電話番号：049-284-5748

取引店：坂戸支店



2009 年 25 周年記念パーティーでの西岡社長（写真右）